

説教 『予感と未来』山本 護 牧師  
聖書 詩編 36:8~10/ルカによる福音書 24:28~35

「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち(ルカ 24:25)」。イエスに呆れられながらも二人の弟子は、聖書を懇切丁寧に教えてもらった(24:27)。そんな二人はイエスに同宿してくれるよう強く求めた(24:28~29)。後になって「二人は、[道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか]と語り合った(24:32)」と気づくが、弟子の心はすでに燃え始めていた。ただこれは予感であって、自覚には至っていない。

「予感」は私たちにも経験がある。しかし現代人は情報過多で、膨大な「分かった事」で動き、予感という不確定な未来で動くことは少ない。予感未来に開かれ、情報は過去の集積だ。二人の弟子は予感から見知らぬイエス(24:16)に同宿を求めた。彼らは過去を見て(24:21)、復活から遠ざかろうとしていた(24:13~14)。しかし聖書を教えられ(24:27)、立ち止まり、燃え始めた予感を軸に転換する。

夕食の席で「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:30~31)」。二人はここでようやくイエスだと認識するが、認識とは「見えなくなること」であった。祈り、パンを裂いて渡す作法は、聖晩餐(22:19)との関連か。いや「賛美の祈り」だから、五千人の男を満腹させた食事(9:16)とのつながりか。いずれにせよ復活したイエスは、祈り、パンを裂き、ここに生きている存在として現れた。だが現実の身体で現れたイエスは、認識された途端に消えてしまう。これはどういうことだろうか。

女たちは天使から「なぜ、生きておられる方を死者の中に探すのか(24:5)」と言われ、「三日目に復活する(9:22,24:7)」と語っていた「イエスの言葉を思い出した(24:8)」。眠っていた過去の言葉が未来に向かって開花したのだ。二人の弟子は「イエスは生きておられる(24:23)」という天使の言葉を、「望みをかけていた(24:21)」忌まわしい過去にしまい込んでいた。ところが聖書を教えられ(24:27)、賛美と祈りとパンを受け取ると、虚空を見ていた目が開け、「イエスは生きておられる」という言葉はそのまま彼らの未来となった。おぼろげな予感だった未来が、はっきりと生きている姿になって、目前に大きく開かれたのだ。するとどうだろう。なんとイエスの「姿は見えなくなった(24:31)」。

イエスはもはや網膜に映った像ではない。キリストとして彼らの存在深くに内在化された。これは私たちの経験とつながる。「見える、聞こえる、分かる」とかの浅層の認識ではない。命の全体にキリストが復活し給う。別方向から言えば、十字架で己が罪は死に、キリストの復活に与る(マ 6:5,8,11)。

「命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る(詩編 36:10)」。命の泉を得、母から生まれて今ここにある。そして再び、復活という命の泉を得る。世の未来がいかに暗かろうと、復活の光を受け取り、私たち自身がささやかな光となろう。「神よ、慈しみはいかに尊いことか。あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ(36:8)」。言葉も、教えも、パンも戴くばかりで私たちは御翼の陰に身を寄せる。キリストは先手を打たれる。だから力んだ決意ではなく、おぼろげな予感を大切にしたい。



#### 【おまけのひとこと】

受け身こそ能動 力瘤を緩めるゆえに 雄弁は過去 周知のことを言いつのりだけではないのか  
沈黙は未来 不可知なものに己を開く キリストの先手に返手で応じられるよう 空っぽでいたい